

【資 料】

2 年次看護学生が基礎看護学実習前 OSCE を ととして臨地実習で実感した OSCE の学習効果

三 味 祥 子^{*1}, 吉 田 和 美^{*2}, 山 本 加奈子^{*2}, 川 西 美 佐^{*2}

【要 旨】

目的：基礎看護学実習前 OSCE が臨地実習において、学生の学びにどのような効果をもたらしたかを明らかにする。

方法：無記名自記式質問用紙により 2 年次看護学生 146 名を対象とし調査した。選択回答は 4 段階評価とし、Wilcoxon の符号付き順位検定を行い各項目を比較検討した。自由記載回答は、質的帰納的に分析した。

結果：実習前 OSCE を受けて学生が認識した臨地実習での学習効果は、実習前 OSCE の各項目で「意識づけてきた」ことは、臨地実習でも「行動できた」として認識し、高い評価であった。また、【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】ことを実習前の事前準備としての効果と感じ、【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】、【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】などを効果とし捉えていた。

結論：実習前 OSCE は臨地実習に臨む学生の意識づけとなり、臨地実習で行動することの認識につながる事が示唆された。

【キーワード】 基礎看護学実習, 実習前 OSCE, 学習効果

1. はじめに

「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」(文部科学省, 2011) では、学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業到達時目標が策定され、社会のニーズに応えるために学士課程卒業生の看護実践能力を有する人材の育成が求められている。しかし、実習時間の短縮や実習場所の縮小化、実習における看護行為の制限などにより、学内での教育方法や臨地実習のあり方などが課題となっている。そのような中で、ペーパーテストなどによる知識の取得を重視する教育のあり方を見直し、現場で必要とされる判断力・技術力・マナーなどの臨床技能の習得を適正に評価する方法が見出され、客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination: 以下 OSCE とする) が近年医療系教育において有効とされている。A 看護大学でも、学生が看護を実践し、自己の看護実践能力の成長を実感できることを目指した成長実感型 OSCE において 5 つの看護実践能力を掲げて、看護実践力育成のための教育として実習前に導入している (平成 21～23 年度大学教育・学生支援推進事業学

生支援推進プログラム: 新道他, 2012)。

そこで、A 看護大学の基礎看護学領域では学生の既習の学びが臨地実習において看護実践能力として結びついていくように、講義と演習の授業構築を考え、実習前 OSCE、臨地実習へと連動していくように教育内容・方法を創意工夫している。学生は一連の授業の過程を経た後に、看護実践能力の習得を評価する実習前 OSCE を受けることで、臨地実習までに学習してきたことがどの程度看護実践能力に結びついているかを自己の成長として感じることができる。また、実習前 OSCE を受けることにより、臨地実習に対する自己の課題が明確となり、臨地実習に向かう準備としての学習の動機づけになるなど、実習前 OSCE の実施が臨地実習に臨む学生の学びに何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。

看護基礎教育において、実習前 OSCE を通して看護学生が実感した学習効果 (笹本他, 2012) や OSCE 評価の差異や課題 (近藤他, 2011)、看護学生の認識からの OSCE の意義 (高橋他, 2009) など OSCE 自体の効果や評価への研究は見受けられ

* 1 広島国際大学

* 2 日本赤十字広島看護大学

る。また、フィジカルアセスメントの技術に特化した OSCE の臨地実習での効果（原田，小澤，田中，濱田，2012）の研究は認められる。しかし，基礎看護学実習において，実習前 OSCE で意識づけられたことが，学生の臨地実習での看護実践行動や学びにどのような効果を及ぼしているかを評価した研究は見受けられない。

そこで，学生が基礎看護学実習前 OSCE を受けることで意識づけできたことは，臨地実習の場で学生の看護実践行動に結びついたのか，また，臨地実習での学びにどのような効果があったのかを明らかにすることで，今後の実習前 OSCE のあり方や教育方法について示唆を得ることができると考える。

II. 用語の定義

本稿で用いる「学習効果」とは，OSCE の評価項目に対して，学生が基礎看護学実習前 OSCE を受けたことによって意識づけできたこと，また，その意識づけにより臨地実習で行動できたことの2つの視点について，学生自身が捉えたこととした。

III. 基礎看護学実習Ⅱ前 OSCE の概要

1. 基礎看護学実習Ⅱ前 OSCE の目的と企画

基礎看護学実習Ⅱの約1ヶ月前に OSCE を実施した2年次生を対象に，学生が対象者の状態に応じた観察技術の実践状況を評価し，実習前の自己の課題を明確にすることを目標とした。そして，1）学生が問診やバイタルサイン測定から対象者に必要なニーズの判断が行え，援助の提案ができること，2）対象者の気持ちに共感した声かけや配慮ができること，3）対象者の状態の観察結果と判断内容を報告できることを基礎看護学実習Ⅱ前 OSCE の学習のねらいとした。

OSCE に用いるシナリオは，学生が5つの能力（看護技術力・看護判断力・コミュニケーション能力・ヒューマン・ケアリングな関係形成力・チーム構築力）を身につけられるように基礎看護学教員で独自にシナリオと評価表の項目を検討・作成した。そして，OSCE 実施の約1ヶ月前に課題を学生に提示し，事前の自己学習が十分に行えるようにした。

2. 基礎看護学実習Ⅱ前 OSCE の実際

OSCE の時間配分は，学生1名につき実施7分，報告内容のまとめ1分，報告2分，フィードバック3分，移動2分の計15分で実施した。シナリオの内容は，腎盂腎炎で発熱があり点滴治療を受けている患者とした。評価項目は，看護技術力では，①腰背部痛について聞くことができる（疾患からくる苦痛

について問診できる：以下括弧内は項目の意図とする注釈）②残尿感について聞くことができる（疾患からくる症状を問診できる）③水分摂取について聞くことができる（対象者に必要な状況を問診できる）④体温を優先して測定できる（バイタルサイン測定の優先順位が分かる）⑤橈骨動脈の部位に示指・中指・環指で触れ脈拍の測定ができる（脈拍を適切な手技を用い測定できる）の5項目とした。看護判断力では，⑥水分が必要な状態であることが判断できる（必要な援助のアセスメントができる）⑦排泄の介助が必要な状況であることが判断できる（安全に対する配慮が考えられる）⑧測定値が基準値であるかどうかの判断ができる⑨対象者への援助の提案ができる（情報をアセスメントし提案ができる）⑩ニーズの未充足が1つ以上抽出できるの5項目とした。コミュニケーション能力では，⑪対象者へ実施項目について同意を得る⑫聞き取りやすい声で言葉かけができる⑬入院後の生活状況について聞くことができる⑭対象者の思いを聞き取ることができるの4項目とした。ヒューマン・ケアリングな関係形成力では，⑮対象者の症状に対して思いやりのある言葉かけができる⑯対象者に対して退室する前に必要な行動ができるの2項目とした。チーム構築力では，⑰指導者に体温の値を報告できる（測定したことの報告ができる）⑱指導者に腰背部痛と残尿感について報告できる（症状について報告できる）⑲指導者に対象者へ必要な援助を1つ以上報告できる（観察からアセスメントしたことを看護援助計画として報告できる）の3項目とし，計19項目で評価した。評価とフィードバックは，教員1名と臨床看護師1名の計2名で行った。

IV. 研究目的

学生の看護実践能力の育成に対し，基礎看護実習前 OSCE が臨地実習での学生の学びにどのような効果をもたらしたかを明らかにする。

V. 研究方法

1. 研究対象者

A 看護大学の基礎看護学実習Ⅱを終了した2年次看護学生146名を対象とした。

2. データ収集期間

平成25年9月下旬～10月上旬の基礎看護学実習Ⅱが終了した約2週間後。

3. データ収集方法

無記名自記式質問用紙により，実習成績評価終了後のファイル返却時にアンケート調査を実施した。

選択回答の項目は、OSCEの評価項目の19項目を質問項目とし、各項目で今回のOSCE課題で臨地実習に向け実施できて欲しかったことの意図について説明が必要な箇所には注釈を付け、イメージできるように作成した。そして、1) 実習前OSCEを受けたことによって意識づけできたこと、2) 意識づけにより臨地実習で行動できたことの2つの視点について、「よくできた」、「ややできた」、「あまりできなかった」、「できなかった」の4段階で評価する選択回答とした。

また、自由記載の項目は、1) 実習前OSCEを受けてどのようなことを臨地実習で役立て、学習する上で活かしたか、2) 実習前OSCEを受けて臨地実習で気づけたことや行動や気持ちの変化になったことの2項目とした。

4. 分析方法

選択回答で得られたデータは、実習前OSCEを受けたことにより『意識づけできた』ことと『意識づけにより臨地実習で行動できた』ことについて、「よくできた」を4点、「ややできた」を3点、「あまりできなかった」を2点、「できなかった」を1点とし、19の各質問項目の平均値と中央値を算出した。『意識づけできた』と『意識づけにより臨地実習で行動できた』の中央値の差についてWilcoxonの符号付き順位検定を行い検討した。解析にはSPSS Ver.20を使用した。

次に、自由記載で得られたデータについては、質的帰納的に分析を行いカテゴリー化した。分析過程では複数の教員で検討し、分析結果の妥当性を高めるようにした。

VI. 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字広島看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号1305)。対象学生に研究依頼書を用いて、研究の目的と意義、研究方法、研究協力は任意であり自由意思での参加であること、参加の可否は成績評価とは一切関係のないこと、無記名化により個人が特定できないよう保証することを口頭で説明し、アンケートの記入を依頼した。アンケートの実施は、実習の成績評価終了後に行い、アンケート用紙の投函をもって同意を得たものとした。また、得られたデータは研究代表者が責任をもって保管し、研究終了後には速やかに処分すること、得られた結果は、学会発表ならびに学術雑誌に投稿することを説明した。

VII. 結 果

調査の結果、146名中120名から回答が得られ(回収率83.3%)、それらの回答から無回答の箇所のあったものの16名を除いた104名(有効回答率71.2%)の有効回答を用い、分析の対象とした。

1. 学生が認識した実習前OSCEを受けて意識づけできたことと意識づけにより臨地実習で行動できたことの比較

実習前OSCEを受けたことによって意識づけできたことの19項目の平均値は3.32であり、実習前OSCEで意識づけできたことにより行動できたことの平均値は3.55であった。また学生は、1項目を除きその他の全ての項目で平均値が3.0以上の高い評価の認識であり、「ややできた」と捉えていた。しかし、13項目の〔入院後の生活状況について聞くことができる〕では、実習前OSCEで意識づけできたことの認識は平均値2.72と19項目中最も低く、「あまりできなかった」と捉えていた。

選択回答のデータを実習前OSCEを受けたことによって意識づけできたこと、実習前OSCEで意識づけできたことにより行動できたことについて19の各項目ごとにおいて平均値と中央値を算出し、検討した。

『意識づけできた』と『意識づけにより臨地実習で行動できた』の中央値の差について、19項目中、〔入院後の生活状況について聞くことができる〕、〔測定したことの報告ができる〕、〔観察からアセスメントしたことを援助計画として報告できる〕の3項目で有意差($p < 0.05$)が認められた。また、〔バイタルサイン測定の優先順位がわかる〕、〔脈拍測定が適切な技術を用いて測定ができる〕、〔安全に対する配慮が考えられる〕、〔測定値が基準値であるかどうかの判断ができる〕、〔情報をアセスメントし援助の提案ができる〕、〔ニーズの未充足が1つ以上抽出できる〕、〔対象者へ実施項目について同意を得る〕、〔聞き取りやすい声で言葉かけができる〕、〔対象者の思いを聞き取ることができる〕、〔対象者の症状に対して思いやりのある言葉かけができる〕、〔症状について報告ができる〕の11項目で有意差($p < 0.01$)が認められた。学生は、19項目中14項目で実習前OSCEを受けたことによって意識づけできたことは、臨地実習で行動できたと認識していた。〔疾患からくる苦痛について問診ができる〕、〔疾患からくる症状を問診できる〕、〔対象者に必要な状況を問診できる〕、〔必要な援助のアセスメントができる〕、〔対象者に対して退室する前に必要な行動ができる〕の5項目においては、有意差は認められなかった。

2. 学生が臨地実習で実感した実習前 OSCE を実施したことによる学習効果

自由記載のデータを学生が臨地実習で実感した実習前 OSCE による学習効果として分析した結果、151のコードと15のサブカテゴリーから、【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】が実習前の事前準備の効果として、【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】、【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】、【対象者の環境に着目し療養生活へ配慮をする】、【思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する】、【コミュニケーションの方法を考え意識する】、【相手に伝わるような報告方法を考える】の7カテゴリーが臨地実習での学習効果として抽出された。

以下の記述中において、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉, コードを[]で表記した。

1) 【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】

学生は実習前 OSCE 受けて「疾患を理解し対象者の状態と結びつける大切さに気づく」ことにより、実習に向けて「疾患や症状を調べ学習する」といった事前学習を行い、〈病気や症状を理解する学習方法を考える〉ことにつながられていた。また、「病態と関連付けて状態を捉える」[関連図を書き対象者の理解につなげる]など、〈病態と対象者を関連させ捉え理解する〉ことで、実習において対象者を

理解していくために必要な、【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】という意識をもち、実習前に実習に向かう事前準備として行っていた。

2) 【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】

「観察項目を事前に準備する」「事前準備を活かし必要な情報収集を行う」などから、学生は疾患により起こっている対象者の状態を捉えようと〈疾患に関する情報収集が行なえるよう事前準備をする〉ようにしていた。また、対象者とコミュニケーションを取りながら、[問診の仕方を工夫する][病態に対する観察を意識して問診する]ことで、〈問診の内容を意識し必要な情報収集を行う〉ようにしていた。そして、[バイタル測定の優先順位を考えて行う][重要な観察項目を理解し優先的に観察する]ことで、〈優先順位を考えて状態の測定・観察を実施する〉ように意識しながら対象者の全体像を捉えていこうという【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】姿勢となっていた。

3) 【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】

対象者のニーズに合わせた援助を行っていくために、対象者の「状態を十分にアセスメントする」ことに配慮しながら、[優先順位を考えて行動できるように気をつける]ことで〈状態や援助の優先度についてアセスメントする〉という判断を行っていた。また、対象者の「未充足なニーズの把握をする」よ

表1 実習前 OSCE で「意識づけてきた」ことにより臨地実習で「行動できた」ことの認識比較

(n = 104)

	意識づけてきたこと			行動できたこと			z 値	p 値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値		
1. 疾患からくる苦痛について問診できる	3.17	0.83	3	3.20	0.87	3	0.503	0.615
2. 疾患からくる症状を問診できる	3.12	0.94	4	3.28	0.72	4	1.782	0.075
3. 対象者に必要な状況を問診できる	3.56	0.60	4	3.56	0.60	4	0.136	0.892
4. バイタルサイン測定の優先順位が分かる	3.30	1.01	3	3.61	0.61	4	3.112	0.002 **
5. 脈拍を適切な手技を用い測定できる	3.67	0.63	3	3.86	0.38	4	3.251	0.001 **
6. 必要な援助のアセスメントができる	3.42	0.71	4	3.40	0.69	4	0.330	0.740
7. 安全に対しての配慮が考えられる	3.15	0.76	3	3.38	0.73	3	2.708	0.007 **
8. 測定値が基準値であるかどうかの判断ができる	3.46	0.65	3	3.64	0.48	4	3.305	0.001 **
9. 情報をアセスメントし提案ができる	3.18	0.72	4	3.48	0.62	3	4.242	0.000 **
10. ニーズの未充足が1つ以上抽出できる	3.39	0.78	4	3.77	0.47	3	4.833	0.000 **
11. 対象者へ実施項目について同意を得る	3.51	0.68	3	3.75	0.48	4	3.801	0.000 **
12. 聞き取りやすい声で言葉かけができる	3.52	0.72	4	3.64	0.61	4	2.200	0.000 **
13. 入院後の生活状況について聞くことができる	2.72	0.96	4	3.50	0.71	3	6.059	0.028 *
14. 対象者の思いを聞き取ることができる	3.01	0.95	4	3.51	0.71	4	4.868	0.000 **
15. 対象者の症状に対して思いやりのある言葉かけができる	3.21	0.78	4	3.53	0.56	4	3.996	0.000 **
16. 対象者に対して退室する前に必要な行動ができる	3.39	0.86	4	3.55	0.64	4	1.753	0.080
17. 測定したことの報告ができる	3.71	0.59	4	3.81	0.44	4	2.066	0.039 *
18. 症状について報告できる	3.25	0.82	4	3.42	0.71	4	2.667	0.008 **
19. 観察からアセスメントしたことを看護援助計画として報告できる	3.41	0.75	4	3.53	0.61	4	1.992	0.046 *

Willcoxon の符号付き順位検定: ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

うに関わりをもち、[ニードに沿った援助計画を立案し実施する]ことを試みることで、〈対象者のニードを捉え必要な援助に取り組む〉ことになり、【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】行動になっていた。

4)【対象者の環境に着目し療養生活へ配慮する】

[療養環境に目を向ける]ことで、対象者の〈環境の変化に注意する〉よう意識していた。また、[療養環境の変化に配慮する]ことで、対象者の〈対象者の生活しやすいような環境に整える〉ようになっていき、【対象者の環境に着目し療養生活へ配慮する】という姿勢へと変化できていった。

5)【思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する】

[対象者の思いを傾聴する][患者の思いを共感し受けとめる]ことを意識し対象者に関わっていく中で、〈療養への思いを共感する姿勢で傾聴する〉ことを大切にしていた。そして、[気持ちに配慮した声かけを考える]ことや[思いやりのある言葉がけを丁寧に行う]ことで〈思いやりある声かけを考え丁寧に接する〉ようにし、【思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する】姿勢をとっていくことで、対象者の思いを第一に考えながら関係性を築くようにしていた。

6)【コミュニケーションの方法を考え意識する】

対象者とコミュニケーションをとるうえで、[言葉づかいに気をつける][コミュニケーションの方法を工夫する][目線や距離感を意識して話す]ことを行いながら、どのようにすれば効果的なコミュ

ニケーションとなるかを考え〈コミュニケーションの取り方に気をつけ工夫する〉ようにしていた。また、自ら[コミュニケーションを積極的に行う]ようにし〈積極的にコミュニケーションをとるように心掛ける〉ことで対象者との援助的人間関係の形成の一つとして【コミュニケーションの方法を考え意識する】取り組みを行っていた。

7)【相手に伝わるような報告方法を考える】

観察した対象者の状態やそこから判断したことを看護師に報告するために、[報告の要点をまとめて伝える][報告内容を選択し報告する]という報告前に〈報告内容をまとめて報告を行う〉ことを試みていた。さらに、報告の内容の[優先順位をつける]ようにし〈報告の優先度を考え伝える〉ことで、【相手に伝わるような報告方法を考える】ことを考えながら行っていた。(表2)

VIII. 考 察

1. 実習前 OSCE を実施したことによる学生の意識づけへの認識と実習前の事前準備における効果

学生は実習前 OSCE を受けることによって、今回の基礎看護学実習Ⅱ前 OSCE のねらいをもとに構成した19の評価項目に対し、2年次学生は実習前に意識づけできたとの認識を「ややできた」と高く評価をしており、臨地実習に臨む学生にとって、実習前 OSCE が学生の意識づけに効果的であったことが考えられる。しかし、[入院後の生活状況について聞くことができる]に対しては、実習前 OSCE による意識づけがどの項目よりも低く、「あまりで

表2 臨地実習で実感した実習前 OSCE の実施による学習効果

カテゴリー	サブカテゴリー
対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する	病気や症状を理解する学習方法を考える 病態と対象者を関連させ捉え理解する
対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む	疾患に関する情報収集が行なえるよう事前準備をする 問診の内容を意識し必要な情報収集を行う 優先順位を考えて状態の測定・観察を実施する
アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する	状態や援助の優先度についてアセスメントする 対象者のニードを捉え必要な援助に取り組む
対象者の環境に着目し療養生活へ配慮する	環境の変化に注意する 対象者の生活しやすいような環境に整える
思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する	療養への思いを共感する姿勢で傾聴する 思いやりある声かけを考え丁寧に接する
コミュニケーションの方法を考え意識する	コミュニケーションの取り方に気をつけ工夫する 積極的にコミュニケーションをとるように心掛ける
相手に伝わるような報告方法を考える	報告内容をまとめて報告を行う 報告の優先度を考え伝える

きなかった」と捉えていた。臨地実習で入院中から対象者の入院後の生活に視点を置き援助を行っていくことは、対象者の健康の回復・維持・増進への援助を実践していく上で大切な視点であるため、学生が臨地実習において対象者の入院後の生活について意識できるようになるよう実習前 OSCE のシナリオを検討し、課題として設定することへの工夫が必要である。

また学生は、実習前 OSCE を受けたことにより、臨地実習において対象者の状態を理解するためには、2 年次生の段階においても臨地実習の事前学習として未習得な疾患を理解する必要性があると自己の課題に気づき、【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】ことに自ら取り組むといった効果が認められた。中村（2011）は、自らの現状を理解することがその後の学習意欲につながると OSCE を実施する教育効果の一つとして述べている。学生は、実習前 OSCE を受けたことで自己の課題を意識することができ、臨地実習に臨む前の事前学習として必要と捉えたことに取り組む動機づけにつながったと考えられる。

2. 実習前 OSCE を実施したことが臨地実習中の学生の学びに及ぼした効果

学生が実習前 OSCE を受けることで意識づけてきたことが、臨地実習で行動として実行できたこととして 19 項目中 17 項目において認識できていたことは、実習前 OSCE を実施することで自己の課題が明確となると共に、実習前 OSCE が臨地実習の場で活かすことのできる課題であったと考えられる。

19 項目中 2 項目の〔対象者に必要な状況を問診できる〕、〔必要な援助のアセスメントができる〕は実習前 OSCE で意識づけてきたと感じられていたが、臨地実習では行動できたと感じたことに認識の向上が認められなかった。その理由として、基礎看護学実習Ⅱを履修する A 大学の 2 年次生のレディネスは、基礎看護領域の履修と人体の構造と機能Ⅰ、病理学の履修は終了しているが、病態治療学や成人看護学領域の履修が未履修であるので、疾患の理解がしづらく、疾患からくる症状のイメージ化ができにくい点が考えられる。そのため、疾患からくる症状の問診や疾患を理解したうえでの対象者に必要な援助のアセスメントの重要性を実習前 OSCE を受けることによって意識づけてきていたが、それらを行ってきたと学生自身が感じる事が難しく、行動できたという認識が得られにくかったと考える。2 年次看護学生に OSCE を行った報告として中村（2011）は、患者がづらいと感じている症状に対してどのよ

うなケアが考えられるかまでの判断は行えず、状況を確認し、背景を探ることまではできるが、それをケアプランまで発展させる症状マネジメントの能力は 2 年次生では十分でないことを示している。学生が実習前 OSCE によって意識できたことが、臨地実習で対象者に対して行動できるという認識がもて、自信につながるためには、実習前 OSCE の課題を 2 年次学生のレディネスに見合い、イメージ化できるものになるように検討していくことが大切である。そして、実習前 OSCE により担当教員が学生の学習状況を認識し、臨地実習において学生の知識と技術が結びつくよう指導していく必要性などが示唆された。

つぎに、学生は実習前 OSCE の事例に対し実際に援助を行い、振り返りを行ったことで、対象者を適切に観察することや情報収集の必要性に気づき、事前に対象者の状態に関する情報を得るための準備を行い、臨地実習において【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】姿勢が認められた。また、【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】ように考え援助を行っていくとする努力がなされ、援助を実施するなかで【対象者の環境に着目し療養生活へ配慮する】ことに気を配り、対象者の環境も整える大切さも援助として取り組んでいた。多賀ら（2009）は、実習前に OSCE を体験することは、学生に臨床現場をイメージした緊張感を与え、責任感に裏づけされた技術や態度の習得に有効であると述べている。このことから、OSCE で実際に事例の対象者に対して援助を実施したことは、学生が対象者を援助していくことに対し責任感が生まれ、臨地実習において対象者を理解するために観察・情報収集取り組み、アセスメントしたことから対象者のニーズを判断し、援助を実施する態度につながる学習効果が認められたと考えられる。さらに、対象者と援助的人間関係を築くために【思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する】ことを行いながら、共感を通して対象者の苦痛や不安、喜びなどを理解しようとする事でより深い対象者の理解につとめ、自ら積極的に対象者と対話していき【コミュニケーションの方法を考え意識する】工夫をしていた。援助的コミュニケーションのための条件として小山（2012）は、共感を通して相手を理解することで、より深い他者の理解に至るとして共感を意識化することの必要性を述べ、鈴木（2009）も共感的に相手に耳を傾けること、その人のことをよりよく理解できるようになり、その人の見方の良さがわかるようになるとコミュニ

ケーションにおいて共感し共感的理解をすることの大事さを述べている。学生はOSCEを受けることでコミュニケーション能力やヒューマンケアリングな関係形成能力を再確認できたことで、臨地実習において対象者に援助の人間関係を築く上でコミュニケーションの取り方を考えながら、共感的な姿勢をとる大切さを学び、OSCEでの学習を意識し活かしていた。

最後に、情報の共有を図ることの必要性を意識づけてきたことから、【相手に伝わるような報告方法を考える】努力をし、看護チームの一員として役割を意識した一つの行動として、観察結果と判断内容を看護師に報告していた。報告は対象者の状況を受けを受ける者が正しく知り、情報共有すると共に、報告内容に対して報告を受けたものは場合により指示を出す必要もあり、情報をまとめ、報告を受ける者にその内容を伝えることは大切な行為である。学生は、日頃の演習時で積み重ねてきた報告の在り方をOSCEを通して振り返ることで大切なことであると再意識し、臨地実習で取り組むことを学習効果として発揮していたと考えられる。また、限られた時間内に情報をまとめ報告するというトレーニングにもなっていたと考えられる。

梶原（2011）は、OSCEは活用目的に合致して臨床能力測定だけでなく患者の立場を考え、患者に提供する看護技術の根拠を学び、さらには、これらの看護実践能力を主体的に習得することができるといえたと述べている。2年次学生にとって臨地実習は、初めて看護過程を用いて自ら看護援助を考え実施する実習であり、臨地実習に向け取り組んできた授業や演習での学習内容を実習前OSCEとおして確認できることで、臨地実習において対象者の状態を把握していく技術を考え、患者の思いやコミュニケーションの取り方を大切に、アセスメントしたことを援助できるように意識して看護実践能力を主体的に習得するように取り組み努力することができていた。また、実習前OSCEにより「意識づけできた」ことが臨地実習において「行動できた」と認識でき実感として捉えることができていた。これらのことが、2年次学生が実習前OSCEを受けて実感できた臨地実習での学習効果と考えられる。

今後、OSCEで意識づけられたことを臨地実習で行動できたとさらに学生が認識でき、実際に看護実践できる学習効果としていくためには、OSCE課題を2年次学生のレディネスを再度踏まえ検討していくと共に、実習前OSCEでのフィードバックがOSCE評価表をもとに臨地実習上で活かされるよう

に指導の工夫をしていく必要性があることなどが今後の課題として示唆された。

IX. 結 論

1. 学生は、実習前OSCEで「意識づけできた」ことで臨地実習でも実践として「行動できた」として高い認識をもち、実感として捉えていた。
2. 【入院後の生活状況について聞くことができる】ことについては、実習前OSCEによる「意識づけできた」ことの認識が低く、生活状況にも関心を向けられるよう実習前OSCE課題の工夫が必要である。
3. 学生は、【対象者理解のために疾患と症状を結びつけ学習する】ことを実習前の事前準備としての効果と感じ、【対象者を理解するための観察・情報収集ができるように取り組む】、【アセスメントから対象者のニーズを捉えた援助を実施する】、【対象者の環境に着目し療養生活へ配慮する】、【思いやりある声かけを意識し共感的態度で接する】、【コミュニケーションの方法を考え意識する】、【相手に伝わるような報告方法を考える】を実習での効果として捉えていた。

X. 本研究の限界および今後の展望

今回の研究は、実習前OSCEを実施したことに対する学生の主観的認識・判断のみで、OSCEをとおして臨地実習で実感した学習効果を調査している研究であるため、実習前OSCEで意識づけできたことが臨地実習において本当に行動としてできていたかどうかは確認できていない。

今後は、OSCEの場面だけでなく、臨地実習で実感した学習効果としては、授業・演習なども大きく関連していることが考えられるため、その点も加味して捉え、調査研究を重ねていくことが重要である。さらに、臨地実習での行動を学生の認識だけで判断するのではなく、教員からの他者評価やOSCE評価点との関連も考え今後の研究につなげていくことが必要であると考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快くご協力いただきました研究対象者の皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究は、平成24年度日本赤十字広島看護大学奨励研究助成金を受けて実施いたしました。

文 献

原田竜三, 小澤知子, 田中由香利, 濱田麻由美(2010).

フィジカルアセスメントの客観的臨床能力試験の導入による臨地実習での効果と今後の課題. 東京医療保健大学医療保健学部看護学科紀要, 1, 51-56.

梶原理絵, 中西純子 (2011). 看護学士過程における OSCE 活用の現状と課題に関する文献検討. 愛媛県立医療技術大学紀要, 8(1), 35-41.

近藤智恵, 市村久美子, 伊藤香世子, 高橋由紀, 沼口知恵子, 黒田鴨子 (2011). OSCE による教員間の評価の差異と課題. 茨城県立医療大学紀要, 16, 1-11.

小山真理子 (2012). 看護学基礎テキスト第4巻 看護の機能と方法. 東京, 日本看護協会出版会.

文部科学省 (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討
会最終報告書. 2014年5月17日, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vb6k2.pdf>.

中村恵子 (2011). 看護 OSCE. 東京, メヂカルフレンド社.

笹本美佐, 小園由未味恵, 奥村ゆかり, 山村美枝, 川西美佐, 中信利恵子, 眞崎直子, 村田由香 (2012). 実習前 OSCE を通して看護学生が実感した学習効果. 日本赤十字看護大学紀要, 12, 79-88.

新道幸恵 (2012). 平成21-23年度大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラム 看護学生のための早期離職予防シミュレーション・ナビゲーター最終報告書.

鈴木肇 (2009). 人間学入門—医療プロをめざすあなたに—. 東京, 南山堂.

多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理, 太田晴美 (2009). 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義. SCU Journal of Design & Nursing, 3(1), 27-34.

高橋由紀, 浅川和美, 沼口知恵子, 黒田鴨子, 伊藤香世子, 近藤智恵, 市村久美子 (2009). 全領域の教員参加による OSCE 実施の評価—看護系大学生の認識から見た OSCE の意義—. 茨城県立医療大学紀要, 14, 1-10.

Learning effects of OSCE that second year nursing students have realized in the practical clinical training through the OSCE before the fundamental nursing training

Shoko SANMI^{*1}, Kazumi YOSHIDA^{*2}, Kanako YAMAMOTO^{*2}, Misa KAWANISHI^{*2}

Abstract:

Purpose: To reveal what effects the OSCE before the fundamental nursing training has imposed on the learning of students in the practical clinical training.

Method: We investigated 146 second year nursing students as subjects by anonymous self-administered questionnaire. We evaluated the selection answers in 4 levels to compare for each item performs the Wilcoxon signed-rank test. Free description answers were analyzed qualitatively and inductively.

Result: For the learning effects in the practical clinical training that the students recognized after receiving the OSCE before the training, they recognized that “they had been able to make themselves aware” in each evaluation item of the OSCE before the training as that “they were able to act” also in the clinical practice, and captured the training at a high evaluation. In addition, they felt that “to learn by linking a disease to the symptoms for the understanding of subjects” as the effect for the advance preparation before the training, and captured “to address so as to enable the observation and information collection for understanding the subjects,” “to perform the assistance by capturing the needs of the subjects from the assessment,” etc. as the effects.

Conclusion: It has been suggested that the OSCE before the training makes the students facing the practical clinical training aware, leading to the recognition to act in the practical clinical training.

Keywords:

fundamental nursing training, OSCE before the training, learning effect

* 1 Hiroshima International University

* 2 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

